
My a Tail Online

銀臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My a Tail Online

【Zコード】

N6188Z

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

次世代VRMMO、『マイアテイル・オンライン』。

プレイヤーは液晶に映るゲーム画面で、コントローラーを持つてプレイするのではなく、ゲームの中に精神を移送し、ゲームの中に入つて直接プレイすることができる。

そう大々的に宣伝したゲーム会社『ゼウス』は、日本、中国、アメリカ、イギリス、フランスの五ヶ国から、それぞれ一万人のベータテストを選出し、してそのゲームをいち早くプレイしてもらつと宣伝する。

悪友達とノリで応募した中学一年生の主人公、四季町空人は、偶然
そのベータテストの一枠に入る事が出来、夏休みの予定も特に決めていなかつたので、そのゲームをプレイすることに決めた。
だがベータテスト初日、彼らの世界は唐突に変わる。
クリアするまで脱出は不可能。ゲームオーバーは死に繋がるという
デスゲームと化した空人は、その過酷な現実を受け入れ、脱出のために異世界を剣士、『クー』として生きていく。

『世界』というものは、それ単体では姿を変えることはない。

変化するという事象には、それを変化させる何かしらの存在がある。

例えば、一億六千五百万年と長く続いた恐竜時代が滅びを迎えた原因だ。

恐竜達はそれまで当たり前のように暮らしていたが、それを唐突に終わらせたのは空から飛来した小惑星だ。

直径十キロメートル、重さ一兆トンもある隕石が地上に落下し、落下した時に放たれた核兵器数千個分の威力もある衝撃によつて、大量の塵が舞い上げられ、空を覆いつくし、地球は氷河期を迎える事によつて恐竜達は死に絶えた。

たつた一つの隕石によつて、地球という世界は氷の星へと変化した。

だがそれは、けして『世界』が自ら姿を変えたのではない。

一つの隕石によつて、姿を変えさせられたのだ。

やがて氷河期が終わり、哺乳類が現れ、人類の起源が大地に二足で立ち上がり、知識を持つて文明を作り上げていったのも、全て人類が行つたことであつて、けして『世界』がそれに合わせて姿を変えたわけではない。

また自然にできた造形物も、大気や地形、太陽からの熱、重力、様々な力があるからこそ、姿を変える事ができただけであつて、けして『世界』がそれを造形しようと思つて造り上げたものではない。では『世界』というものを変えることが出切るものはなんなのか？私はここで思考と答えてみる。

思考というものは、すなわち人の考えだ。人一人の考えによつて、世界といふものは姿を変える。

即ち、思考の数だけ様々な姿を持つ世界があるということだ。

私には思考がある。

それは私の中にも一つの世界があるということだ。

私が考えを変えない限り私の世界はけして変わることはない。

もしもここに新たな世界が誕生したとする。

その世界で、君達の中の世界は変わるのだろうか。

私は知りたい。

そのために、私は世界を作ろう。

どうか見せてくれ。

私が作り出した世界で君達が何を思い、何を感じ、何をして生きていくのか、どうか見せて欲しい。君達だけの My a Ta i l（自分だけの物語）を。

それがこの世界を生み出した私のたつた一つの願いでもある。

序章（後書き）

感想、コメント待っています。

第一話 いつもの日常

一〇五三年、七月一十日。

明日から夏休みだなー、と俺、四季町空人はぼんやりと空を眺めながらそう思った。

ふと窓に映る自分の姿を見てみる。

その後で深いため息を吐く。

（うーむ、相変わらず見事なまでの童顔、もとい女顔……）

彼には、実年齢より幼く見られがちな傾向があつた。

骨太さがあまり感じられない色白で華奢な身体。

中性的な線の細い顔立ち。

多少鋭さはあるものの、威圧的な雰囲気があまり感じられない両目。

多少はねつ毛があるので、それでも大人しい印象が目立つ髪の毛。

初対面の人間が見れば、良くて年下の男の子。悪くて女の子。最悪で年下の女の子。ちなみにラストが一番多かつたりする。

今年で十五になる思春期真っ盛りな俺にとって、一番のコンプレックスになっているのは言うまでもなかつた。

はあ、とため息を吐きながら教卓の後ろで未だに夏休み中の注意を述べている教師を一瞥する。

今はLHRの時間だった。

夏休み前日の今日は午前授業で、終業式を終えた後はLHRで必須連絡事項を教師が伝えればまっすぐ家へと帰れるのだが、そのLHRが空人には今はやたらと長く感じられた。

普段なら一応、聞くには聞く教師の言葉なのだが、自分のコンプレックスを見た後の憂鬱な気分からすぐに脱却できるほど俺は器用じゃないので、教師の言葉など今では耳障りなものでしかなかつた。早く終わらないかなー、と不真面目極まりない思考で机に突つ伏

した俺はこの時、気付かなかつた。

懐に入れていた携帯端末が震えていたことに。

ようやく「HR」が終わり、悪友達に一言声をかけると、俺はすべてに外に出た。

今日は予定があるのだ。

アスファルトで固められた地面の上を肌から沸きあがつてくる汗を滴らせながら歩き、熱線を放射し続ける太陽を横断歩道で止まるたびに忌々しげに睨み付けることを繰り返しながら、ようやく目的の場所に到着する。

病院。

俺が住むこの街で最も大きな病院に彼は用があつたのだ。
別に俺は何か病気を抱えている訳ではない。

受付で手を消毒し、受付の人挨拶を交わすと、そのままエントランスを過ぎ、階段を上つて一つの病室の前へと立つ。

四季町奏絵

俺の妹の病室だ。

三回ノックをしてからゆづくりドアをスライドする。

白い病室の窓際に置かれたベッドの上で、点滴を打つていて一人の少女が携帯ゲーム機を手に持つて何やら難しそうな顔をしていた。
(ああ、またか)

俺は苦笑を浮かべると、手頃な位置に荷物を置き、室内に備えられているパイプ椅子に座ると、彼女のゲームが一段落するまでしばらく待つてやる。

俺の妹、四季町奏恵は気管支系の病気を患つており、そのせいで幼い頃から入退院を繰り返す日々を送つており、もはやこの病院に

住んでいると言つても過言ではなかつた。

現に彼女の病室は大量のゲーム機器で埋め尽くされていたのだから。

ちなみにこの大量のゲームを貸し『えたのは俺の母親である。

なんでも俺達の母親は、俺達兄妹一人を生む時まで携帯ゲーム機を手放さずに御産の痛みを耐えながらプレイを続け、ゲームをしながら出産を成功させた猛者だつたらしい。

せめて妹だけはそんな不名誉極まりないものにはなつて欲しくないと思うのが俺の切なる願いだつた。

しばらく経つと、奏恵は達成感に満ちた顔つきになる。

どうやらゲームが一段落したようだ。

そのタイミングを見計らつて。

「よう、奏恵」

声をかけた瞬間、奏恵はビクリと体を震わせ、すぐ隣に座つていた俺に視線を向けると同時に安堵し、すぐにハツとなると、今度は頬を赤く染めながら憎々しげな視線を向けてきた。

「何よ、あんたいたの」

「いたよ、三十分くらい前から。相変わらずゲームの事に関しては凄まじい集中力を發揮させるな」

皮肉を込めて言つたつもりなのだが、奏恵は今の言葉に対し、ふふん、となぜか胸を誇らしげに張つていた。

「当然よ、どんなゲームでも一瞬の油断がゲームオーバーに繋がるの。このぐらい集中力はゲームには必須よ、必須」

「……あつ、そ」

皮肉をなぜか誇らしげな言葉で返されてしまい、母親と同じようにどんどん妹が廃人ゲームとしての道を歩みつつあることに若干ながら頭を痛めつつ、俺は鞄の中から一つの箱を取り出す。

「ほら、いつものやつ」

「ん、ありがと」

箱を受け取ると、奏恵は嬉しそうな表情でそれを開ける。中には、

バーラ、チョコなど数種類のクッキーが入っていた。

奏恵はクッキーを一つ手に取つて口に運ぶと、幸せそうな表情を浮かべる。

その表情を見て、俺も笑みを浮かべる。

「うん、やっぱり美味しい」

「そりや、俺の愛情が入つてるからな。美味しいのは当然だ

「ぶふっ！」

俺の言葉に耐え切れず、奏恵は思わずむせてしまう。

なにやつてんだか、と眩きながら彼女の背中を優しくさする。一応の原因は俺にあるのだが…後悔はしていない。樂しいから。

しばらくむせていた奏恵だったが、ようやく発作も治まってきたのか、キッと涙目で俺を睨む。

「あ、あんた何変な事言つてんのよ…」

「変な事じやないだろ、料理をする上で愛情といつものはとても必要なものなんだぞ」

「あんたが愛情とか柄じやないでしょー！」

「それは認める

「ならやんな！バカ兄貴！－！」

「ん？ そんな言い方するのなら、次から作ってきてやらないぞ？」

「うつ、そ、それは……」

俺の言葉に奏恵は急にしおらしくなる。

その表情に俺は苦笑すると、[冗談だよ、と言ひながら彼女の頭を優しく撫でる。

俺の言葉に奏恵は心の底から安堵したような顔をすると、すぐに顔を真っ赤にして顔をブイッと逸らす。子供扱いされて恥ずかしいようだが、それでもどこか安心しているところを見ると、俺なんかの手料理がいかに彼女にとつて大切な物なのかがよく解る。

そもそも俺がなぜこんな事をしているのかというと、奏恵が昔、病院食があまり美味しくない、と呴いたのを耳にしたのがきっかけで、その日から俺は奏恵にお菓子を作つてあげていた。

それだけではなく、少しでも奏恵の笑顔を見たくて、少しでも奏恵に寂しい思いをさせたくない、俺は三日も開けずに、妹の病室に顔を出してあげているのだ。

……俺って結構シスコンなんだな。

そんな解りきった事実に思わず苦笑してしまつ。

しかし奏恵の方はそれが少しだけ恥ずかしいらしく、そのままボフツ、という音を立てながら横になってしまった。

妹の行動に肩をすくめつつ、ふとベッドの横に置かれた雑誌の表紙に書かれているロゴが目に付いた。

「マイアテイル…オンライン?」

なんだそりや、と口にしかけてふと思い出す。

マイアテイル・オンライン。

世界初の次世代ゲームの名前である。

プレイヤーは液晶画面に映るCGを手に持ったコントローラーを使って画面上に映るキャラクターを操作するのではなく、『タラリア』と名付けられたゲームハードを行い、プレイヤーは肉体から意識を切り離し、その意識を仮想空間へ移送させる。

その仮想世界でプレイヤーは自らの意思で自由に体を動かすことが出来、ゲームの中で剣を振り回し、魔法を使つ事が出来るという、世のゲームマニア達の夢を体現させた究極のRPGと呼べるものである。しかし一つだけ問題があつた。

この夢のようなゲームを実現させてくれるゲームハード『タラリア』なのだが…値段がもの凄くお高いのだ。

当然、一般庶民である俺達に手を出せる代物ではない。

しかし。

(そういうや、たしかベータテストの抽選をやつっていたつけな)

この『タラリア』というゲームハードを開発した会社『ゼウス』は、日本、アメリカ、中国、イギリス、フランスの五ヵ国から一人ずつ、計五万人のベータテスターを選出して参加してもらう、と大々的に発表してきたのだ。

仮想空間で遊べる。

そう大々的に宣伝した『ゼウス』に対しても、応募が殺到したのは言うまでもない。

俺自身、悪友達との話聞いた時に悪ノリのような物で手に持っていた携帯端末でベータテスターに応募したものだ。

「なあ、奏恵はこれに応募はしたのか？」

奏恵の事だから、きっと応募くらいやつたんだろうなと思つて質問してみたのだが……。

「……してない」

「へっ？」

予想外の返答に空人は思わず固まってしまった。

ゲーム廃人の道を着々と歩み続いている奏恵の事ながら、この夢のゲームを体感できるベータテストには、きっと参加すると思っていたのだが……。

「あたしは今入院してるし……もし当たっても……今の体じゃ……」「あつ……」

そこまで言われてようやく氣付く。

奏恵は気管支系の病気を患つていて、そのせいで外出もままならない状態だ。

常に薬を点滴していなければいけないし、寝る時には呼吸器を付けないと危険な状態に陥ってしまう程、彼女の体は悪い。

「……悪い」

無神経な言葉をかけてしまった事に、俺は申し訳なさと同時に、自分の無神経さに腹が立つてくる。

「ううん、兄貴があたしの事を気遣ってくれるのは解るから、丈夫」

奏恵は優しく微笑みながら俺の手にそつと自分の手を重ねてくれた。

「そつか……ありがとな、奏恵。おかげで元気出た」

優しく微笑みながら俺はそつと奏恵の頭を撫でる。短く切られた

栗色の髪の毛を櫛で梳かすよう、優しく、優しく撫で続ける。

「こっちも…いつも、ありがと」

後半に行くに連れ、消え入りそぞなぐらい低い言葉で礼を言ひつ秦

恵。

恥ずかしがり屋な妹に苦笑しつつ、ポンと頭を軽く叩くと、ふと時間が気になつて懐から携帯端末を取り出してみる。

「ん？」

デスクトップを開くと、そこにはメールが届いている事を知らせる手紙のアイコンがあることに気付く。
誰だろう、とメールを開いて…固まつた。

「兄貴？」

訝しげな声を上げる奏恵の声に反応し、俺は見間違いではないのか、ともう一度メールの内容を確認する。
何度も確認しても内容は同じだった。

「……当たつた」

「はっ？」

「マイアテイル・オンラインの募集に…当選した」「えつ…」

ええええええ！？と病室に妹の驚愕の声が響き渡る。
耳が思わずキーンとなつてしまつたが、その事を指摘する前に奏恵は俺の手から端末を奪い取ると、メールの内容を確認する。

「…本当だ…嘘みたい…」

「俺も嘘みたいだ…信じられねえよ」

しばらく一人して携帯端末に映るメールの内容に驚愕していたのだが、少しずつ落ち着いてきたのか、深呼吸を繰り返して俺達は向かい合いつように座る。

「……で、これどうする？」

「どうするって…行つてくれればいいじゃない。兄貴、行きたくて応募したんでしょ？」

「いや、そりゃ行きたいけど…」

どこか歯切れが悪い俺の言葉に訝しげな視線を向ける奏恵。そしてあ、とため息を吐く。

「兄貴、ひょっとしてあたしに遠慮しない？」

「……解つちまうか」

「そりや解るわよ」

「そつか、と俺は苦笑する。

さすがに何年も一緒にいる妹なので、肉親の心情など、すぐに解つてしまふのだろう。

「お前が入院してゐるのに、俺だけ遊び呆けるなんて、少し気が引けてな……」

「なら、どんな感じだつたか教えて……楽しみにしてるから」

「……奏恵……」

奏恵の言葉に、決心した。

妹のお願いなら、断る訳にはいかないからな。

「解つたよ、どんなんだつたかしつかり体験してくるぜー！」

「楽しみに待つてるよ、兄貴」

さて、そう決まつたら早速必要な物の準備だな。

夏休みの予定はどうしようか迷つていたところだつたから、調度いい。この際だから楽しんでくるとしますかな。

だがその前に。

「…………お袋をどうやって説得するかだな」

「…………その、頑張りなさいよ」

ああ、頑張るさ……あの超廻ゲーマーの手からなんとしても、このベータテストの抽選メモリを守つてみせる！

第一話 いつもの日常（後書き）

感想、指摘等、待っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188z/>

My a Tail Online

2011年12月25日18時54分発行